

第十六章 書籍の業績

一 当時の出版事情

丸善出版の和書は、理学・工学書が主であったから時勢に煩わされることなく、逐次出版されていた。それぞれについては資料編出版書目録に詳しいので、ここでは省略する。

一方「学鑑」昭和十一年六月号に、松本喜一の「最近読書界の趨勢」と題する興味ある記事があり、当時の我が国の和書の動向を知る上で大いに参考になると思うから次にその抄文を掲載しておく。

最近に於ける読書界の趨勢を紹介するといつても、私の取扱ふ分野は、おのづから、私の関係する帝国図書館の閲覧者といふ特定の読者層について観察したものに限られるのである。しかしながら、図書館が社会人の書齋であるとするならば、そこに顕はれる閲覧の傾向は、やがて現代の読書界の動向を表示する一断面として、読書人にとっては多少の興味を感じ得ることであらうと思ふ。

図書館の閲覧者は一般的に学生が多い。平日でも過半数にのぼるのである。帝国図書館は勿論我国最高の機関であるが、倫敦のブリティッシュ・ミュージアムのライブラリーや、巴里のビブリオテク・ナショナルな

どと違つて、満十五歳以上のものなら誰でも自由に登館し得る制度になつてゐるので、六、七月の青葉の頃や、十一月から十二月にかけての秋冬の交は勿論、二月三月の春の季節には殊に学生が多い。この頃は所謂図書館のスイーゾンで、とみに激増する学生群が朝来館前に殺到して、開館前一時間といふに既に入館を待ちわぶる人々の行列は、蜿蜒として長蛇の如く寛永寺のほとりまで続くのが常である。職業別統計によると学生は全閲覧者の六三パーセントといふ高度にのぼることが少くない。その結果として一般の調査研究者は入館難に少からず悩まされるので、中には悪貨は良貨を駆逐すと叫んだり、これでは帝国図書館でなくて受験図書館だと憤慨する者も少くないので、当事者たる私どもはこの問題には殊に困惑されてゐる。(中略)

かうした情態のもとにおいて、過去一年間に於ける閲覧傾向をたどつて見るのに、第一に私どもの眼に映ずるのは、実社会の動きが直ちに読書に反映するといふことである。先づ思想的方面に於ては前年来のフアシズムが依然その勢力を持統して、国家主義が思想生活の中核を為せる観を呈し、殊に国体の明徴が高唱されてゐる結果は、必然的に多数の読者から要求される図書の中には、「日本精神の本質(井上哲次郎)」「日本精神概説(清原貞雄)」「倫理学上より観たる日本精神(吉田静致)」「日本精神読本(小山松吉)」「日本精神(紀平正美)」「続日本精神史研究(和辻哲郎)」などがあり、更に古事記、日本書紀、神皇正統記などの古典が繙かれてゐた。また昨年は国体明徴に關聯して、政府に於ては高等試験委員の更迭を断行すると共に、憲法講習会を開催して帝国憲法の根本義を闡明するに努めた結果、国家試験に応ぜんとする学徒以外に、一般閲覧人中に憲法の検討が目立つに至つたのも亦時局の反映と観るべきであらう。(中略)

さらに日本精神の問題と関聯して日本農民の社会的地位が論ぜられ、農村に於ける封建性の問題が再燃し來つて、これに現実問題の結合せることから、農村問題の再検討が促された結果、「農村問題対策（助川啓四郎）」、「農村更生の原理（本位田祥男）」、「如何にして農村を救ふべきか（佐藤浅五郎）」等が可成に読まれてゐたことも亦注目に値するところである。

時局の影響として国防問題、陸海軍、航空等に関する圖書が一年を通じて熟読されたことも見のがすことは出来ない。殊に軍需品景気の關係から化学工業熱に拍車を加へたため、この部門に属する圖書が多く読まれてゐる。例へば「ゴム工業（波田強一）」、「染料化学（高岡斉）」、「塗料及塗装法（清水正雄）」、「硝子（上田清）」等が屢々出納手の手にかゝつたのも当然な現象と見られるであらう。本館の利用者中に産業界の人々が激増したことは、図書館が単に学生や有閑階級の機関でないことを実証するものであり、更に読書が生活の欠くべからざる要素となつたことを如実に物語るものでなければならぬ。

従来青年学徒の寵児たる觀があつた社会科学に関する圖書は、今や殆んど顧みられなくなつて、自然科学がこれに代はるに至つたことは図書館に於ける著しい現象の一つである。（中略）試みにこの方面の圖書中比較的多く閲読せられるものを挙げると、「自然科学概論（石原純）」、「万有科学大系（仲摩照久編）」、「生物学通論（大島正満）」、「初等天文学講話（山本一清）」、「波動論（庄司彦六）」、「動物と人生（宮島幹之助）」、「数学史研究（小倉金之助）」、「力学（田丸卓郎）」、「級数論（岡田良知）」、「銀（渡辺万次郎）」等がある。殊に私どもの注意を惹くのは鳥類に関する圖書が多数の読者を吸収してゐることである。即ち月刊雑誌「野鳥」を始めとし

て「虫鳥と生活する（中西悟堂）」、「野鳥と共に（同上）」、「鳥の生活と談叢（藤沢衛彦）」、「鳥と芸術（金井紫雲）」などはその著しいものである。

さらば読書界の王座を占むるものは何かといへば、勿論文学書である。本館に於ても文学書は貸付図書冊数中実に二二パーセントといふ高率で、読まれる種類からいつても、回数からいつても断然群を抜いて常に第一位を保つてゐる。これはまた世界的現象でもある。この文学書中でも最も多く読まれるのは何といつても小説で、文芸懇話会が前年懇話会賞を「紋章」その他の作家横光利一、「あにいもと」其他の作家室生犀星に授与し、次いで芥川賞が石川達三に、直木賞が川口松太郎に与へられた結果、この人々の作品に人氣が集中され、殊にインテリゲンチアの多い本館の読者中には之等諸家の中では横光利一の支持者が多く、「紋章」を始め彼の作品の閲読されない日はないのである。これについては島崎藤村、谷崎潤一郎、夏目漱石、芥川龍之介、川端康成、山本有三、林芙美子等のものが愛読されてゐる。通俗小説畑では何といつても菊池寛が筆頭で、吉屋信子、久米正雄、小島政二郎、加藤武雄、牧逸馬等のものがこれにつき、大衆小説の分野に於ては三上於菟吉、吉川英治、大仏次郎、長谷川伸、邦枝完二、中里介山、野村胡堂、矢田挿雲、子母沢寛、土師清二、田中貢太郎、白井喬二等の諸家のものが常に相当の読者を得てゐる。就中藤村が七年の歳月を費し渾身の精力を傾けて完成された大作「夜明け前」に対しては、朝日の文化賞が授与された関係からも、此小説が中央公論に掲載されたものであるに拘らず、老大家の力作に対し敬虔の念を捧げる意味に於て、老若男女の読者によつてつぎつぎと閲読されつゝあることは図書館に於ける新しきレコードを作つたものといへやう。

次に所謂プロレタリア文学に於ては、林房雄、藤森成吉、島木健作、細田民樹、武田麟太郎、片岡鉄兵などのものが読まれてゐる。プロレタリア文学が近時相当多くの読者を得てゐるのは、會ての機械的な公式主義をすて、その階級性を稀薄にして、極めて妥協的な態度をとるに至つた事などもこれが原因の一つでなければならぬ。こゝにも社会情勢の推移と思想の動きが、かうした傾向をもたらしたものであらうと思はれる。

さらに外国文学を一瞥するに、フランス、ドイツ、ロシア等の作家の紹介、作品の翻訳等は依然として盛観を呈し、トルストイ、ドストイエフスキー、バルザック、フロオーベル、アンドレ・ジイド、モリエール、モーパッサン、ゲーテ等の全集刊行に伴つて、その閲読も少くないのである。

以上は最近の閲読に現はれた特殊傾向の一斑である。勿論図書館の読者は男女を問はずそれぞれ特定の目的を抱いて登館するもので、随つて其閲読する図書も千差万別で、渉獵する所は極めて広汎に亙り、新著古典必ずしも一樣ではない。茲にはたゞ和漢書の閲読実況に徴して、特に顯著なる軌近の傾向と見るべきものを抄録したに過ぎない。

こうした読書界の一般的な上昇傾向に刺激されて出版業界も活気を呈して來た。丸善の刊行物は主として大日本印刷株式会社と株式会社三秀社によって印刷され、製本は荻村製本所に請け負わせていた。元來出版物の主要な資材は印刷用紙であり、原則として用紙類は版元で紙の仕入をするので、所要数量の獲得の成否は、直接この事業の遂行に重大な關係を及ぼすのである。それ故に当事者は用紙獲得に異常な熱情を燃やし、殊に日華事変勃発以後に

於ける資材難に際しては、最善の手を打って之に対処した。従って昭和十三年の上半期ごろまでは、比較的円滑に入手することが出来た。

然るに同年八月、商工省令によるバルブ節約の訓令に基き、急に紙質が低下し、翌十四年になると用紙の入手が益々困難になり、十六年春遂に用紙も又統制され、配給制度が布かれてこれに従わざるを得なくなった。幸いにも丸善は他の一流出版会社と共に良心的な出版業者と評価され、用紙申請量のほとんど一〇〇%を配給されたのであった。従って昭和十六年二月には出版部の拡張が取締役会で議決され、企画・編輯の二課をおき部員も約二倍に増加されるようになった。この出版部の拡張は、一見時代に逆行するかの如く思われるが、実は昭和十五年八月、洋書の海外注文は、為替管理法強化による制限で、これまで洋書輸入業者の自粛に委されていたものが停止されることになったため洋書に代って、比較的進展が望まれた理工学書の出版を強化するのが狙いであった。このため外国課から四、五名の社員が出版部に移籍された。

ところで幸いなことには、昭和十五年十二月、政府の懲憑により、出版諸団体が解散し、新たにその月の十九日に日本出版文化協会が発足し、丸善からは荒川実が理事に就任し、その他石川実、川井達夫、八木佐吉なども協会並に日本出版配給株式会社などの役員或いは業務委員を兼務することになり、一方用紙の割当も、理工学・自然科学専門書等の出版は第一級にランクされ、頗る有利に展開した。現在尚ドル箱的出版物と目されている「建築設計資料集成」も、この頃の企画で、仕事は順調に進み、その第一集（菊倍判三五三頁・定価八円）が出版されたのは昭和十七年であった。

二 洋 書 販 売

ところで話を再び洋書に戻し、日華事変前後から太平洋戦争にいたるまでの状況について記して見よう。已にしばしば述べたように、ミニ・デバートに発展した丸善であったが、その中核をなすものは、何んと言っても洋書の輸入販売である。「洋書の丸善」と言われた所以もそこにあった。これについては今更くり返して言う必要はなからうが、昭和二十六年版の「丸善社史」に、此の時期に於ける丸善の面目を語る挿話がのっているから転載しておく。

三宅騏一博士の記録中に、丸善は外国書の百貨店というべき書店で、大抵の新刊書は一通りそろってゐる。丸善でもそうであるから、欧米の書店は一層完備してゐるであらうと思つて向うの書店に行つて見て、その貧弱なのに驚いた。昭和十二年十一月に渡米した際サンフランシスコの某書店に行つて、これは丸善にあった「米国の大学」(American Colleges and Universities)という書物を見せて呉れというと、それは専門書を売ってゐる書店に行かないとないとのことであつた。そこで専門書店に行つて見ると、旧版の分はあるが新版はないとのことであつた。それからニューヨークに行つて見てもロンドンでもベルリンでも、丸善のように完備した書店はなく、書物を買うのに少なからぬ不便を感じた。古本屋はイギリスにもドイツにも仲々立派な完備したものがあつて、この点では丸善は遙かに及ばないが、あらゆる新刊書を一通りそろえてゐる点では、丸善は正に世界一というても過言でないと思うと記るされ、尚、鳥居龍蔵博士や桑木嚴翼博士なども、殆ど同様

の意見を述べられてゐる。

この記事からでも知られるように、海外出版物の輸入と販売とは、わが国文化の発展に貢献せんとする丸善の使命であつたから、書籍部の業務の大半がこれに集中され、日華事変直前頃は、本邦に於ける輸入外国書籍の約九〇%を取扱っていた。しかし昭和十二年東亜の風雲が愈々けわしくなると、同年六月から洋書の輸入取締が強化され、この衝に當つたものの苦勞は尋常一様ではなかつた。この間の事情を物語る好個の記録があるから、委しくはそれに譲ることにする。

昭和四十二年三月三十日、本社会議室に於て、「太平洋戦争前後に於ける洋書輸入事情」と云うテーマで、当時この業務の首脳として活躍した輸出部参与石川実と洋書第一課長田辺寛との対談会を開いた。その内容は細大洩さず記録されているが、今そのうちから必要な個所を抄録して見よう。

田辺 満州事變がおこつてから思想的な本を取りますと内務省の警保局がやかましく検閲するようになった。

石川 警保局は輸入されて市販されるものを検閲し、税関は通関の際に検閲するという制度になつて來た。

(注 十二年九月輸入品等臨時措置法施行)

田辺 昭和十二年一月に輸入為替許可制が採用されるようになり、洋書の輸入も実績により無為替輸入許可証の交付を受け、送金にはその許可証の番号を附して許可を受けることになつた。

石川 昭和十四年十二月に内閣情報局が設置され、圖書の出版販売関係の監督官庁となり、洋書の輸入もそ

の管轄下に入ることになった。そして洋書輸入審議会が創設された。十五年か十六年であったと思う。陸・海軍、文部・大蔵・外務各省の関係各員で構成され、洋書輸入業者のグループ、洋書輸入懇話会を代表して丸善の山崎取締役と石川外国課長が、随時要請によって会合に出席した。

田辺 それが洋書輸入審議会ですね。

石川 こちらにもそれに対応して三月三日に海外出版物輸入同業会というのが十九社でもって結成されて、丸善が理事長になって三越、三省堂、南江堂、バート商会、国際書房が理事になった。(略)一番シヨックだったのは独ソ開戦だ。シベリア經由便がストップしてしまった。(注 昭和十六年六月二十二日、独ソ開戦)それまではとにかく仲々賑やかに洋書が入って来たのだから。

田辺 特にドイツの本が沢山入っている。僕の記憶ではドイツの本は医書と機械関係の本が多かったですね。理化学、自然科学もどんどん入って来ました。特に機械の本は沢山入ってました。Springer社の工学書はいくら取っても間に合わない位であった。(略)シベリア便の杜絶後しばらくは若干スイス經由でもって入ってくるのもあったけれども、だんだん駄目になり、遂に全面的に杜絶した。

石川 それでいよいよ全面的に入らなくなった。しかし当時の統計を見るとごく少しずつ、わずかながら入っていたんですね。

田辺 これは山崎取締役と桜井さんが上海に行かれて Book Mart など、むこうにあった洋書があるだけ買って来たのが入っているのです。あとは孤児院 Zi-Ka-Wei (上海徐家匯土山灣印書館)が上海で出版をして

いてそこにあつた本を買つて来た。

(注 孤兒院印刷所の原名は 'Imprimerie la Mission Catholique Orphelinat de T'ou-Sé-Wé, Près Chang-Hai)

この対談記録はまだまだ続くが、ここに現書籍仕入部長桜井喜代志の名前が出たので、その手柄話を聞くことにしよう。

洋書が入らなくなりまして上海經由で取る方法はないかというので、私と上司の山崎民雄取締役とが上海へ行きました。太平洋戦争の始まる直前、その時マニラ經由で上海までは洋書が来ていたので、これを日本へどうして持つて来るか色々調査と交渉を重ねた結果、正式の形では入らないのですが、漸くルートがついて入る見通しがつかしました。それは現地の Kelly and Walsh でやってくれるという事になったからです。只だ支払が出来ない。しかし特円というのがあるのだそうでした(そこではじめて知ったのですが)交戦国間で送れる円があり軍が押えているとのことでした。それを出してくれば良いというので帰つて来て軍に話したら特円を出そうということになりまして——軍の方も洋書がどうしても欲しいということもあって、上海へ出かけたのですから——ところが太平洋戦争が始まって、総て駄目になってしまいました。その頃の上海の Kelly and Walsh にはオクスフォード大学の出版書はありましたが、殆んど当時の上海版という海賊版で棚が埋っていました。

一つ面白い事がありました。フランス租界の中に Zi-Ka-Wei という孤児院がありまして、そこへ行くのは日本租界からガーデン・ブリッヂを越えて行かねばならず危険で生命の保障は出来ないといわれていましたが、とにかくその出版書を買付けたくて自動車で行きましたら Variétés Sinologiques という有名な叢書が沢山ありまして、それを随分買い込みました。お金を持って行きませんでしたから取引先の木村公司以立替えてもらって。その帰途 Book Mart という看板が掛っている古本屋を見付けそこへ入りましたら当時日本では仲々手に入らない本が大変安いので——特に東洋関係のものは——次から次へ抜き出して買いましたら「お前はどこだ」と言いますので、「丸善だ」と言いますと、地下へ連れて行かれましてびっくりしました。貴重な古本がぎっしり詰っております。それを随分買って日本に送りました。(昭和四十二年十二月二十六日於社史編纂会議、桜井喜代志委員談)

桜井は微笑をたゝえながら、こう語っていたが、今ではよき思い出になってはいるものの、恐らくその当時は、毗を決して東奔西走、しばらくも席が暖まることはなかったろう。こうした努力がつづけられていたにもかかわらず、十三年には欧州の国際勢が、益々悪化し、このため英・米・仏各国からの輸入量が次第に減じたが、友好関係にあったドイツからの輸入はかえって増加するようになった。尤も英・米・仏からの輸入は主として海路を利用したが、これには相当の時日が要したことで、危険度が次第に増して来たことも主要な原因であった。それに引き換え、シベリア鉄道を利用する方が捷徑であり、まだ日・露・独の国際勢も左程緊迫していなかったことも見落

すわけにはいかないだろう。そこで此の間の消息を物語るものとして二つの統計を挙げて見よう。

自昭和十一年至同十五年に於ける当社取扱いの外国書籍輸入一覽表（金額・円）

年次/国別	英	米	独	仏	其他の諸国	計
昭和十一年	一、二八、四八四	一、〇六、九三三	一、七二、八六一	二六七、七八	三四、〇八三	四、四六五、〇六六
昭和十二年	一、二七、九五二	一、二〇七、四四五	一、八〇一、四九二	二八、六六三	三二〇、八四四	四、七五六、三九五
昭和十三年	九四三、九五四	一、〇六五、三〇五	一、五八、五七二	一五、二一〇	三二一、九六四	三、九二二、八九五
昭和十四年	八二四、一六五	一、二五、四六九	二、〇〇四、七五	一二、九七七	七三、〇六七	四、二九、四二九
昭和十五年	七元、九六六	一、四六、八七七	二、六五九、二九二	六四、七七七	一九〇、二一九	五、〇七〇、九三三
合計	四、八六七、五〇〇	五、八九四、九三八	九、七五、九六八	八三七、二三五	一、二一九、〇六七	三二、四三四、七〇八

自昭和十一年至同十五年に於ける外国書籍輸入一覽表（金額・円）

年次/国別	英	米	独	仏	其他の諸国	計
昭和十一年	一、四二七、七〇〇	一、二八三、九〇〇	二、〇六六、二〇〇	三三二、二〇〇	二六八、九〇〇	五、三三七、九〇〇
昭和十二年	一、四九七、四〇〇	一、五九、三〇〇	二、二五一、九〇〇	二九八、四〇〇	三八八、五〇〇	五、九四五、五〇〇
昭和十三年	一、二九、九〇〇	一、三三、六〇〇	一、九一〇、七〇〇	一九一、四〇〇	二七七、五〇〇	四、八九一、〇〇〇
昭和十四年	一、〇一七、七〇〇	一、四〇六、八〇〇	二、五五、九〇〇	一四一、二〇〇	二五、一〇〇	五、二八六、七〇〇
昭和十五年	九二二、五〇〇	一、六三、五〇〇	三、三四、一〇〇	八、九〇〇	三三七、六〇〇	六、三三八、六〇〇
合計	九、〇三三、二〇〇	七、三三五、一〇〇	三三、〇五八、八〇〇	一、〇三三、一〇〇	一、三六七、六〇〇	二七、八一九、八〇〇

（海外出版物輸入同業会調べ）

その一つは丸善及び洋書輸入同業会が取扱った年間輸入総額の一覽表であり、もう一つはアナウンスメント所載の輸入書籍の分類別年間総数である。

(Sは昭和の略)

Classification	S. 5	S. 10	S. 15	Classification	S. 5	S. 10	S. 15
Theology & Religion	272	207	156	Astronomy	53	31	81
Philosophy & Psychology	786	387		Physics & Natural Science in General	427	318	197
Education	302	170	50	Chemistry	333	187	215
Sociology & Social Politics	841	375	206	Physiography & Geology	1,611	84	122
Law	408	566	188	Natural History, Biology, Botany & Zoology	448	320	221
Political Science	735	568	478	Medicine	957	565	387
Economics		1,072	491	Agriculture, Gardening, Live Stock, Fishery etc.			
Commerce etc.	1,827	326	231	Chemical Technology & Manufactures	363	249	204
Languages, Philology & etc.	*293	256	175	Engineering in General, Civil Engineering etc.	324	281	309
Bibliography & Library & etc.	72	75			302	206	**213
Statistics, Year Book & etc.	37			Mechanical Engineering	245	168	191
Journalism, News Papers & etc.	43	38		Electrical Engineering	307	137	128
Literature	871	303					
Poetry, Drama, Theatrical							

Arts, Motion Pictures etc.	577	292	Mining & Metallurgy	170	130	200
Novels, Romances, Stories, Fairy Tales & Juvenile Books	1,460	761	Naval & Military Science	113	141	188
Fine Arts	630	197	Automobile & Aeronautics	207	141	188
Architecture		78	Geography, Maps, Atlases etc.	341	305	
Music		103	Biography & History	546	339	245
Photography	67	113	Anthropology & Archaeology	236	154	
Amusements & Sports	211	184	Eastern Asia and its Neighbours	328	250	213
Domestic Science & Etiquette	72	66				
Mathematics	264	158	Total	17,140	10,301	5,297

* Encyclopaediaを含む ** Architectureを含む

今これらの表によって各年代毎に要求された洋書の傾向を知る上でのよき手懸りとなり、また丸善の洋書取扱量がこの五年間に我国に於ける総取扱量の実に八〇％強の率を占め、如何に洋書輸入に力を入れていたかが理解出来るだろう。

言うまでもなく昭和十四年（一九三九）は、欧州の風雲急を告げ、独・伊の攻勢は日増に激しくなり、イタリアのアルバニア占領、ドイツのポーランド侵入から英・仏の対独宣戦となり、遂に第二次世界大戦にまで発展するにいたった歴史的な年であった。これに刺激されたわが読書界も、欧州の状況に目を転じ、殊に戦争に関する書籍雑誌

などの売行が目立って良好になった。即ちドイツものでは、“Clausewitz-Kriegs-Philosophie” “Fichte-Reden an die deutsche Nation”、又独・英・仏・伊語版の戦争画報 “Signal” は羽が生えたように売れて行った。その他特に目立ったものとしては英文学では “James Joyce-Ulysses” 及び “Pearl Buck-Good Earth” 等があった。しかし、これら欧州諸国との商取引から予想されることは、将来洋書の輸入が困難になるだろうと言うことであったから、首脳部は書籍部機構の一部改正を断行し、審査課内の古書係を主体とし、仲間課及雑誌課の古書扱いを併合した古書課を新設し、昭和十五年五月十五日からその業務を開始した。昭和十六年一月号の「学鑑」に初めて古書目録の欄が登場し、読者の注文に応じている。尤もこの欄は十月号で廃止されたが、その十か月間に記載された点数は、重複をも含めて、総数五三六部に達している。